

# MATSU REKI

二〇二五年  
春号

# 8

松江の名工

# 小林如泥

その技  
神の如し



小林如泥作「袖障子」(東京国立博物館蔵)  
Image: TNM Image Archives



小林如泥作「茶箱」(東京国立博物館蔵)  
Image: TNM Image Archives

## CONTENTS

- 2-3 みどころ紹介
- 館藏品展「松江藩を支えた家老 大橋茂右衛門」
- 企画展「松江の名工・小林如泥 —その技、神の如し—」

- 4 | これからのスポット展示・ミニ展示
- 5 | コラム  
雲陽秘事記あらかると 第7回  
(名誉館長 藤岡大拙)
- 6 | 松江おもしろ談義ダイジェスト
- 7 | 歴史スポットめぐり  
—乙部灘—  
INFORMATION
- 8 | 地域ゆかりの資料紹介  
—乃木編—

# かろう 松江藩を支えた家老 おおはしも えもん 大橋茂右衛門

2025 1.24<金> → 3.30<日>

休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日)  
 開館時間 9:00~17:00(観覧受付は16:30まで)  
 会場 松江歴史館 企画展示室  
 主催 松江歴史館  
 観覧料 大人300円(240円) 小・中学生100円(80円)

※( )内は20名以上の団体料金  
 ※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金  
 ※基本展示室とのセット券の料金は大人600円(480円)、  
 小・中学生300円(240円)



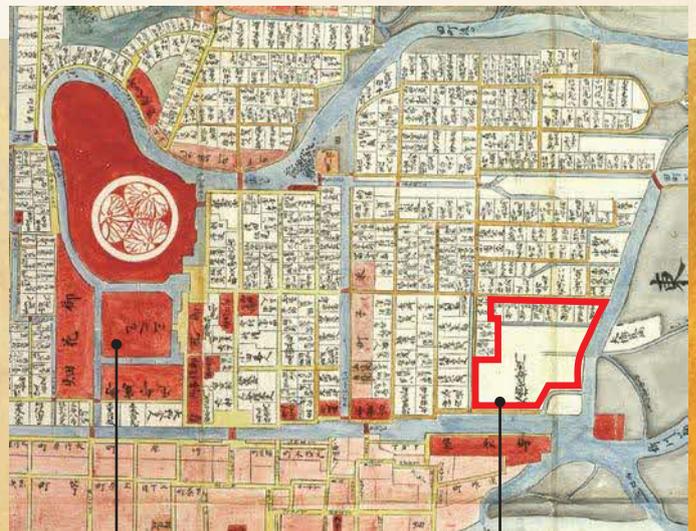
尾が上に伸び、  
羽を広げた  
トンボじゃ。



## 大橋家の屋敷地は 藩主の御殿より広かった!

大橋茂右衛門の屋敷は、松江城下の東端(現在の南田町)にありました。大橋家の家来である与力の屋敷を含めた敷地面積は、約46,000㎡であり、東京ドーム1個分とほぼ同じです。また、松江藩の政務を行い藩主の居所となった松江城三之丸の敷地よりも大きく描かれています。松江藩家老の大橋家の格が絵図に描かれた屋敷の広さから見て取れます。

松江城下絵図(部分、当館蔵、天保年間)



松江城三之丸

大橋茂右衛門屋敷

## ふくしままさのり かっちゅう 福島正則から譲り受けた甲冑

前にしか進まないトンボをモチーフにした大橋家伝来の甲冑です。江戸時代後期の大橋家では、この甲冑を広島藩主であった福島正則から拝領したと伝えていました。胴の上部に大橋家の家紋「抱き茗荷」をあしらひ、兜の中央にある前立には松江藩の合印「猪目」を付けています。

茶系威桶側二枚胴具足(当館蔵、大橋家伝来)

小林如泥(宝暦3年[1753]-文化10年[1813])は、松江藩松平家7代藩主松平治郷(号不昧)に仕えた指物師(木工細工の職人)で、透かし彫りや厚材の扱いに優れ、煙草盆や茶箱、建造物の装飾なども手がけました。「その技、神の如し」とたたえられた技は、後世の作り手に影響を与えました。本展では、小林如泥の作品と如泥に影響を受けた人々の作品を通して松江が誇る木工文化の素晴らしさを改めてご紹介します。



文化5年(1808)、如泥は松平不昧の命により、品川大崎下屋敷の茶苑にあった稻荷社に一对の神狐を納めました。この神狐はその原型で、稻荷社に納めた神狐は杉材の木目を生かした作品であったといえます。

小林如泥作《神狐》  
(江戸時代(18世紀)、城山稻荷神社蔵)

厚さ2mmの板の、向かって右側に後ろを向いた牛を、左側に木に寄りかかり目をつむる牧童を、中央に柳の木が真横に伸びる風景を彫りあらわしています。牧童の表情や牛の脚・尾などは、光も通さないほどの細い線で彫られているにもかかわらず、線は迷いがなく、作者の技量の高さがうかがえます。

小林如泥作《桑十牛図透彫刀掛》  
(江戸時代(18世紀)、島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

※本展は国立博物館収蔵品貸与促進事業の特別協力を受けています。

「企画展」  
松江の名工  
小林如泥  
—その技、神の如し—

2025  
4.25<金> → 6.15<日>

休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日、但し4/28[月]は開館)  
開館時間 9:00~17:00(観覧受付は16:30まで)  
会場 松江歴史館 企画展示室  
主催 松江歴史館  
特別協力 国立文化財機構文化財活用センター、東京国立博物館  
観覧料 大人680円(540円)、小・中学生340円(270円)  
市民割引 大人340円、小・中学生170円

※( )内は20名以上の団体料金  
※高校・大学・専門学校に通う学生は学生証の提示で団体料金  
※基本展示室とのセット券の料金は大人1030円(820円)、小・中学生520円(420円)  
※松江市在住者は運転免許証・マイナンバーカードなど現住所を確認できるものの提示で市民割引料金



図柄トレース図



# SPOT

【スポット展示】 【会場】基本展示室最終コーナー  
※観覧には基本展示観覧券が必要です



宍道湖の四ツ手網漁

4/1(火) -  
5/25(日)

## 豊穡の湖 —宍道湖の漁撈用具—

春はシラウオ、夏はエビ、秋のスズキに冬のアマサギ。松江の食膳を彩る魚介類を、日本有数の汽水湖である宍道湖は育ててきました。宍道湖の漁師が使った多種多様な道具は、水産物と食文化の豊かさを物語ります。令和6年3月21日に国の登録有形民俗文化財になった「島根半島沿岸及び宍道湖・中海の漁撈用具」1,598点の内、宍道湖の漁撈用具は642点にのぼります。今回はその一部を展示して、宍道湖がもたらす恵みを受けた人々の暮らしに触れます。

## ミニ展示 スポット展示

これからの

7/29(火) -  
9/28(日)

## 終戦80年記念 出征する若者へ

第二次世界大戦が終戦を迎えてから今年で80年になります。この松江からも多くの若者が戦地に向かいました。見送る家族は、戦地での活躍や無事の生還を祈って送り出します。本展では、過去の出来事になりつつある戦争について未来を担う若い世代に受け継ぐため、出征の際に掲げた職や激励の言葉を書き記した国旗、銃弾に当たらないよう祈りを込めて作った千人針などを紹介します。



千人針で作った日の丸と鉄兜の下に付ける頭巾(当館蔵)

新収蔵品や最新の研究にまつわる資料、四季折々の作品などを、館内の小さなスペースで特集展示します。おおよそ二か月に一度、展示替えをしています。

# MINI

【ミニ展示】 【会場】展示ホール展示室前 ※観覧無料

4/1(火) -  
5/25(日)

## 不昧の美意識を 伝える名工たち

松江藩主で大名茶人として知られる松平不昧は、茶道具を集める一方で、自らの美意識による茶道具を松江藩の職人にも作らせた。そのことにより、職人たちに不昧の美意識が伝承したのです。不昧の指導を受けた職人たちが、代々茶道具を作り続けたことで、不昧の美意識が現在にも伝わっています。



長岡住右衛門作《楽山焼 蕎麦写茶碗》(当館蔵)

長さ101メートル、  
1,767人を描く松江藩の大名行列図！  
先頭から順に場面替えをしています。  
最後尾の展示まであと2年の予定。

## 基本展示室も展示替えがあります

松江藩の歴史や文化を紹介する基本展示室(常設展示室)では、3か月に一度、大名行列図や町絵図、刀剣などを展示替えしています。展示替えのスケジュールなどの詳細は、随時ホームページでご案内します。



松平齊貴上洛絵巻(当館蔵)

# 雲陽秘事記

## あらかると

松江歴史館 名誉館長  
藤岡 大拙



### 雲陽秘事記

何時、誰が著したか分からないが、人から人へ書き写されて伝わった逸話集。松江藩松平家初代藩主直政から六代宗行の時代までが取り扱われ、後、八代藩主斉恒までが追記された。収録された約二百話にも及ぶ記事は、虚実混交の憾みがあるとはいえ、よく吟味して読むと、松江藩の歴史の深叢に分け入ることができる。

## 第7回

# 筆頭家老 大橋茂右衛門

松平直政が出雲に入部した時、六

人の功臣を重用した。乙部可正・三谷

長玄・朝日重政・神谷富次・大橋政貞・

柳多弍道の六人である。後に彼らを

代々家老と言う。大橋家を除く五家

は、結城秀康以来の重臣である。独り

大橋家は尾張国津島の出自で、いわば

外様であったが、六家の中では最も禄

高が大きく、六千石余と足輕三十人を

給与されていた。その大橋茂右衛門

政貞は、どんな人物だったのか、雲陽

秘事記にこんな逸話が載っている。

浪人中の政貞の娘が疱瘡にかかった。医者は手を尽くしたが、もうこれ以上は、高価な高麗人参を与えるしかないという。政貞は家財道具を売り払って人参を買い求めるが、長く続かず、遂に娘は亡くなった。

てほしい」

「それは目出度い。御用金千両はお易いことだ」

政貞は具足櫃の中から千両を取り出し、吉村に渡した。これを見ていた政貞の妻は、大いに立腹して、

「お前さまは、なんと薄情なお方か。我が娘が大患いをし、人參代がないために死にました。吉村様に渡された千両が、もし娘の薬代になっていたら助かったかもしれませぬ」

「娘はわれわれ二人の子じゃ。たとえ死んだとて、我々だけの問題だ。しかし、あの千両の金子は、武士のため、または軍用のために役立てるものなのだ」

政貞は同郷尾張出身の福島正則の家臣であった。正則は秀吉に可愛がられ、賤ヶ岳七本槍の一番槍で勇名をはせ、関ヶ原合戦後、安芸・備後四九万八千余石の大大名に昇進し、広島城にいた。しかし、無断で城を修築したことを咎められて改易。四万五千石の隠居料だけを与えられ、信州川中島に蟄居させられた。政貞はこの時浪

人になったと思われる。その後、松江藩主になった京極忠高に仕えたが、再び浪人し、江戸へ上つて松平隠岐守の足輕となつて門前の辻番所に勤めていた。あるとき、松平直政が隠岐守の茶会に招待されて、門をくぐった。

直政は茶会が終わると、隠岐守に言った。

「門前の足輕老人を拙者に譲つてくださらぬか」

「それはいと易きこと」とて、政貞を呼び寄せ、直政が口を開いた。

「いかに茂右衛門、今日より、主従の約束をしよう」

「私は傍輩の吉村又右衛門と堅い約束をしたことがございます。それはお互い、一万石でないと主取りはせぬと吉村は先ほど、松平越中守様に一万石で召し抱えられました。私も一万石でなければ仕官いたしかねます」

「それは、いかようにもなることだ」かくして政貞は直政の家臣となり、しかも、代々家老六家の筆頭として、大橋家は幕末まで続くのである。

# 松江 おもしろ談義 ダイジェスト

松江歴史館では、毎回異なるテーマを設けて松江の歴史やゆかりの美術のお話をする「松江おもしろ談義」を開催しています。今回は令和6年10月の講座の内容をダイジェストでお届けします。

## 特別展「月照寺と松平家の宝」こぼれ話

令和六年十月四日から十一月二十四日まで開催した月照寺開基三六〇周年記念特別展「月照寺と松平家の宝」に関連して、展示会場では紹介できなかった月照寺にまつわるトピックをお話ししました。

まず一つ目の話題は、藩主の月照寺参拝についてです。月照寺は松平家の菩提寺ですので、藩主たちが国元へ帰ってきている時には必ず参拝することになっていました。その参拝の様子を知ることができる資料が遺されています。松平治郷(号不昧)の参拝記録が載る、松江藩の寺社奉行・二部次郎兵衛の「勤番日記」です。日記を分析した『松江市史』によると、寛政十一年(一七九九)、治郷は体調が良くなかったためか、通常参加するはずの寺社参詣や年中行事を欠席しています。この年の十月に国元・松江へ帰った際には月照寺へ参詣することが検討されましたが、延期されてしまいました。その後十二月には、藩主帰国後に寺院への参詣がないことが寺社奉行で問題とされ、特に月照寺、円流寺、誓願寺、天倫寺、慈雲寺への参詣が懸案となっていました。正月にもこの五か寺に参詣する予定がたてられましたがまたも延期となり、三月になりようやく月照

寺のみに参詣して、翌週に治郷は江戸へ戻ったのでした。この記録からは、どんなに体調が悪くても、参詣が最優先されるのは菩提寺である月照寺であったということを知ることができそうです。

次に、特別展で展観した月照寺蔵狩野永雲筆「十六羅漢図」について詳しく紹介しました。狩野永雲は、松江松平家初代藩主・直政、二代・綱隆の頃に活躍した松江藩御用絵師です。もとは太田氏という松江藩士ですが、江戸で狩野派の絵師・狩野安信に絵を学び、狩野の姓を受けました。この永雲が描いた「十六羅漢図」は、十六羅漢(釈迦の法を継ぐ十六人の弟子)を一面ずつにわけて描いたもので、金地に白緑や群青の絵具の色が映える美しい作品で

す。ここに描かれる羅漢たちは永雲オリジナルの図像なのかと思いきやそうではなく、狩野派につたわる図像が基になっていると考えられます。その証拠に、この月照寺本「十六羅漢図」とほとんど同じ図様の作品が、永雲の師・安信によって描かれ、京都・萬福寺に奉納されています。月照寺本「十六羅漢図」は月照寺にある仏教美術として優れた作であるだけでなく、地方に伝播した狩野派の絵師の研究にも重要な作品といえましょう。

ほかにも、特別展で展示した虚堂智愚筆「照禪者あて偈頌(破れ虚堂)」(国宝、東京国立博物館蔵)を松平不昧がいかに大切にしていたのか、などをお話ししました。

(副主任学芸員 藤岡奈緒美)



狩野永雲筆「十六羅漢図」(月照寺蔵)のうち一面

## ひと足のばして歴史スポットめぐり

### おとべなだ 乙部灘

水の都と呼ばれる松江では、江戸時代から水路を利用していました。そのことがわかる設備が松江歴史館北側の堀端に「乙部灘」として残っています。灘とは、陸上から川面に降りるため、階段状に作られたものです。灘には舟が着き、人の移動や物資の輸送に役立てたのです。

「乙部灘」の名称は、松江歴史館の場所にかつて松江藩家老乙部家の屋敷があり、その門前にあったことに由来します。松江には改修した灘やそのままの姿で残る灘があります。堀川遊覧船に乗り、灘を探してみたいはいかがでしょうか。



乙部灘と松江城天守

アクセス ≫ 松江歴史館より北へすぐ(徒歩1分)

## INFORMATION

### 松江歴史館からのお知らせ

### 料金改定のお知らせと 市民割引の開始について

松江歴史館と松江ホーランエンヤ伝承館では、令和7年4月1日より観覧料・施設使用料を改定します。松江市民の方は、運転免許証やマイナンバーカードなど、現住所が確認できるものを受付で提示いただくと、一般料金の半額で展示を観覧できるようになります。年間パスポートも市民割引になります。詳細は歴史館・伝承館のHPをご覧ください。



松江歴史館HP

#### 【料金表】改定後の観覧料

区分		個人	松江市民
松江歴史館	基本展示	大人	700円 <b>350円</b>
		小中学生	350円 <b>180円</b>
	企画展示	展示ごとに金額が異なります。	
年間パスポート	大人	2,100円	<b>1,050円</b>
	小中学生	1,050円	<b>540円</b>
松江ホーランエンヤ伝承館	大人	270円	<b>140円</b>
	小中学生	140円	<b>70円</b>

※年間パスポートは購入日から1年間、基本展示・企画展示が何度でも観覧できるお得なパスポートです。



### 現代の名工 伊丹二夫氏 ご勇退のお知らせ

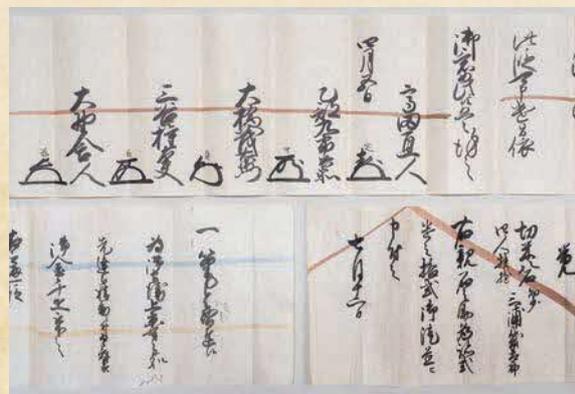
松江歴史館開館以来、「喫茶きはる」において数々の素晴らしい和菓子を作り続け、松江のお茶文化と和菓子を全国に広めてこられた 現代の名工・伊丹二夫氏のご勇退されました。

伊丹氏の作る上生菓子をご愛顧いただきました皆様には心より感謝するとともに、引き続き「喫茶きはる」をお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

# わがとこに、 何があるかね？

出雲弁で「わたしたちの地域に何があるの?」という意味

松江歴史館は、松江市域ゆかりの歴史資料や美術作品を多数収蔵しています。このシリーズでは、収蔵資料や近年調査した資料などを地域ごとに紹介します。



松江藩の御用紙(当館蔵)

## のしらがみ 松江藩御用の野白紙

### 乃木編

松江藩にまつわる逸話集『雲陽秘事記』に「野白御紙漉の由来并中條善左衛門の事」という一文があります。

松江藩主の松平直政公が、旧領越前から呼び寄せた中條善左衛門を召し連れ、意宇郡野白村にお出ましになりました。そこで善左衛門に紙を漉かせたのが、野白御紙漉の始まりです。二代目善左衛門には、秘伝である「越前奉書」の製法を会得するよう命じました。越前に送り込まれた善左衛門は、耳が聞こえず、話すこともできない振りをして働きました。これに気を許した職人は、善左衛門の前で隠さず紙漉きをするようになったのです。その様を見聞きして技を習得した善左衛門は、夜に紛れて出雲に帰りました。それから野白村では越前以上に良い紙ができるようになりました。

このエピソードは史実と異なるかもしれませんが、江戸時代の記録や現在の町

の中にも、野白村(乃白村とも書きます)における紙漉の跡形があります。

享保二年(一七一七)に成立した出雲国の地誌『雲陽誌』は、野白村での紙漉を「此川の流水にて紙をすくなり、越州・濃州にもおとらすといふ」と記録しています。村を貫流する忌部川の流水を使って、優れた紙を産出する越前国(現在の福井県)や美濃国(現在の岐阜県)にも劣らない紙を漉く、と賞賛しているのです。

それ程の紙を産する野白村ですが、工房の数は限られていました。出雲国を統治するための基礎データ、今で言う所の国勢調査の結果をまとめたような『雲陽大数録』には、十八世紀後半の「紙漉の軒数が記してあります。そこには「乃白三軒」とあり、出雲国内二八五軒の内、野白村の製紙業者はわずか三軒だったことが分かります。しかし、この三軒が松江藩の御用を賄う重役を担っていたのです。中條善左衛門、野津甚七、野津甚八から

始まる三家は、松江藩に仕える下級藩士として、代々紙漉に従事しました。

松江藩が必要とした紙は、どのようなものだったのでしょうか。事務用品の御用紙は、使用する役所によってデザインが異なり、御仕置所用は紙の中央に赤黄色の横線一筋、御用所用は黄色の横線一筋、御目付所用は赤の山形線、というように定まっていました。上質の紙は贈答品になり、地域通貨である藩札の用紙も必要でした。こうした紙の需要にこたえて、野白紙は多種多様に発展したのです。

乃木地区の乃白町にある野白神社の境内に、製紙業者が信仰した穀木神社があります。参道脇には「安政二卯年十二月吉日」野津甚七／野津儀右エ門／中條善左エ門」と刻まれた石灯籠があり、野白村の紙屋三軒の名を現地に残しています。

(副主任学芸員 笠井今日子)